

---

 学 会 記 事
 

---

## 第16回新潟血栓止血研究会

日 時 昭和63年11月5日(土)  
午後3時より  
会 場 有任記念館(2階)

## 一 般 演 題

## 1) ワーファリン療法中のビタミンK依存性凝固因子(II, VII, IX, X) および抗凝固因子(PC, PS)の動態

高橋 芳右・帯刀 巨	服部 晃・柴田 昭	(新潟大学第一内科)
和田 研・高桑 悦子		
吉野 紀子・花野 政晴		(新潟大学第一内科)
和泉 徹・荒井 裕		
柴田 昭		
林 千治		(新潟大学公衆衛生)

〔目的〕ワーファリン療法時にはビタミンK依存性凝固因子に加え抗凝固因子のPCおよびPSの低下もきたすが、その特徴を明らかにする。

〔対象〕長期ワーファリン服用者を対象とし、凝固因子およびPCを100例、PSを60例で検討した。更に別の30例でPCを詳細に検討した。

〔結果〕ビタミンK依存性凝固因子活性、抗原量はトロンボテスト値に依存して低下した。活性値は抗原量より低値で、しかもその比はトロンボテスト値と相関し、抗凝固療法が強いほどPIVKAの相対濃度が高いと考えられた。PCおよびPS抗原も凝固因子レベルと正相関して低下した。凝固因子抗原/PC抗原比はワーファリン療法の強さと無関係に一定であった。またfree PS/total PS比も一定であった。充分な抗凝固療法下でのPCを詳細に検討すると、total PC抗原とアミド活性は近似したが、Gla-PC抗原はより低値で、抗凝固活性は更に低値を示した。トロンボテスト値とは抗凝固活性とGla-PC抗原のみが正相関した。

〔結語〕長期ワーファリン服用時には凝固因子と抗凝固因子は概してバランスを保ちながら低下する。PIVKA-PCはアミド分解能を有するが、生理的機能は抗凝固活性に反映されるものと考えられる。

2) ITP に対する  $\gamma$ -globulin 大量投与の治療成績

## —新潟県における多施設協同研究—

布施 一郎・花野 政晴	(新潟大学第一内科)
服部 晃・柴田 昭	
真田 雅好	(新潟市民病院)
佐藤 正之・村川 英三	(県立がんセンター)
飯泉 敏雄	(県立吉田病院)
黒川 和泉	(長岡日赤病院)
中村 忠夫	(小千谷総合病院)

ITP に対する  $\gamma$ -globulin 大量投与は、高価な反面、急な止血を要する場合や、手術時、出産時などに有効である事が報告されている。今回、我々は新潟県下における ITP に対する  $\gamma$ -globulin 大量投与の成績を多施設協同研究により明らかにしたので報告する。対象症例は26例(急性1例、慢性23例、慢性期急性増悪2例)であり、投与方法は300mg/kg/day以上、5日間連続で行なった。治療効果は投与後5日目までの判定で5万以上に増加したものを有効とする38.4%で、2万以上5万未満の増加が29.1%、不変例が32.5%であった。治療効果に及ぼす因子として、性差、年齢、前治療の有無、併用薬剤の種類、発症後の経過期間、治療前の血小板数について検討すると、いずれにおいても有意差はみられなかったが、女性において有効率が高い傾向にあった。有効例での血小板数のピーク値は1例を除いて5~10日にあり、手術等を前提としての投与の際には、約1週間前からの投与が安全と思われた。

## 3) 脳梗塞再発防止のための患者別コントロールによるアスピリン・チクロピデン併用療法—中間報告

服部 晃	(新潟大学第一内科)
柴田 昭	(第一内科血栓止血班)
伊藤 粹子・渡部 透	(新潟南病院)
滝沢慎一郎・矢沢 光良	(新潟こばり病院)
本間 義章	(佐渡総合病院)
栗林 和敏	(新潟聖園病院)
飯泉 俊雄	(県立吉田病院)

患者毎に出血の起きない範囲で血小板機能を強く抑制する事により再発の防止を意図する本研究は進行中であるが、これまでの成績をまとめ、従来の成績と比較した。対象：臨床所見またはCTから診断されたTIA 6, RI-ND 1, 脳こう塞血栓66, 計73(男48, 女25)例。年齢74.0±10.9歳。発症または診断からの経過10.5±19.2月。

方法：アスピリン 10~60mg/日、チクロピデン 100~300mg/日の併用で凝集能をADP 10 $\mu$ Mで50~60%、

そして collagen 2 $\mu$ g/ml で30~50%に保つ。

結果：観察期間；20.3 $\pm$ 17.0月。再発；脳こう塞4例（死亡0）。副作用；脳出血1，皮下出血1，咯血1で死亡0。年間再発率；3.23%。

考案：未治療群の年間再発例は本邦で，TIA を含み 13.9%（平井ら），15.6%（伊藤ら），抗血小板あるいは抗凝固療法群では 6.3%（山の内），6.8%（平井），9.9%（伊藤ら），10.8%（山の内），TIA では 30.5%（村上ら），TIA/RIND では 16.8%（山の内）であるので，本研究は今後さらに継続検討する価値があると考えられる。

#### 4) 脳卒中とプラスミノゲン異常症

坂井 則子・青海 明実  
市橋 義裕・金内 幸彦（桑名病院検査科）  
井上 敏男・渡辺 靖子  
竹内 美保・多田まゆみ  
宮川 照夫（同 脳外科）

〈目的〉プラスミノゲン（以下 PLG）異常症と血栓症との関連が指摘されているが，当院脳神経外科において経験した PLG 異常症について検討を行ったので報告する。

〈対象〉健常者45例，当院に昭和61年11月1日から63年9月31日に入院した脳血管障害者987例およびその他の脳外科疾患患者391例。

〈結果〉①当院脳神経外科で経験した PLG 異常症の出現率は3.6%であった。疾患別出現率はクモ膜下出血2.9%，脳内出血3.3%，閉塞性疾患4.6%，その他の脳外科疾患2.0%で，閉塞性疾患で高い傾向を示した。③当院で経験した PLG 異常49例では他の凝固線溶因子活性は正常であった。④ PLG 異常症を伴った脳梗塞例の年齢はやや若年の傾向がみられた。⑤ PLG 異常症の CT 上の梗塞パターンには一定の傾向はみられなかった。

〈考察〉PLG 異常症は血栓症のリスクファクターの1つとなり得ると推察された。

#### ワークショップ

##### 最近経験した出血性素因例

##### 1) 最近当院で経験した出血性素因症例

吉田 和永・本間 正恵（厚生連佐渡総合病院  
渡辺トシエ 検査部）  
本間 義章（同 神経内科）  
漆山 勝（同 内科）

〈はじめに〉

昭和62年3月から昭和63年10月までに当院で経験した

DIC 症例について検討し若干の考察を加えたので報告する。

〈まとめ〉

1. DIC 症例は10例で，悪性腫瘍に伴うもの6例，重症感染症に伴うもの3例，Weber-Christian 病に伴うもの1例であった。

2. 悪性腫瘍に伴う DIC 症例中4例は骨あるいは骨髄に転移の認められるものであった。

3. DIC 症例中10例とも FM テスト陽性であり，Dダイマーは検索した7例中6例が陽性であった。また悪性腫瘍に伴う DIC 症例で，DIC スコア5点以下のうちに FM テスト，Dダイマーが強陽性を示し，約1週間後に DIC スコア8点となった例があり，FM テスト，Dダイマーの Pre-DIC 段階での鋭敏性が示唆された。

##### 2) APTT 延長症例の検討

中川 利子（県立がんセンター  
新潟病院）

活性化部分トロンボプラスチン時間測定は，内因系凝固機能異常のスクリーニング検査として重要である。当院での昭和62年12月~63年1月までの APTT 延長（36秒以上）例は69/941件で，今回その原因を検討した。肝疾患によるもの34検体を除いた35検体が問題になった。採血ミスが1件，薬剤性凝固障害が5件，循環抗凝血素例が4件みられた。残りの16症例17検体に共通してみられた凝固異常は，XII因子の低下（10.1~53%）であった。これらの基礎疾患としては9/16例が悪性腫瘍であり，種々の原因が考えられるが詳細は不明である。このうち興味ある症例として，ネフローゼによるXII因子10.1%，PK 13.6%と著しい低下例を経験した。ただ本例はXII因子の抗原も低下しており，XII因子単独欠損症との関連も問題になる。APTT 延長例ではその結果が問題ではなく，その原因が問題であると思われる。APTT の軽度延長例の中には臨床症状が無く，出血の危険性の高い疾患も含まれており，常に注意する必要があると思われる。

##### 3) Fibrinopeptide-A の放出異常を認めた

フィブリノーゲン異常症

—Firinogen Niigata—

外立美津江・長野 茂雄（県立吉田病院）  
佐山多美子・山田 公作（検査科）  
飯泉 俊雄（同 内科）

〈目的〉子宮筋腫の術前検査においてトロンビン（Th）